

地域生活支援部会報告

地域生活支援部会 内田 哲正

近年、グループホームにおける不妊処置の強制や、軽度知的障害者の出産後の乳児院への預け入れなど、優生思想を想起させる事例が報道され、社会的な議論を呼びました。

これらの事例は、障害者の自己決定権が軽視されやすい現状を浮き彫りにしています。

グループホームは、利用者の生活全般を支える場であると同時に、利用者一人ひとりが自らの人生を主体的に選択し、豊かに生きることとを支援する場であるべきです。恋愛、結婚、出産といったテーマは、個人の価値観が強く表れるため、とすれば支援者側が避けてしまいがちですが、利用者の自己決定を尊重する上で、真摯に向き合う必要があります。

今回、地域生活支援部会では、グループホーム利用者の結婚事例を題材に、分科会を開催しました。事例を通じて、自由であるべき恋愛や結婚が、障害特性や周囲の状況によって容易に制限されてしまう現実が浮き彫りになりました。

当事者は、多くの課題を抱えながらも困難を乗り越え、周囲の支援を得ながら結婚を実現しました。

この過程は、支援者自身が自らの価値観を問い直し、支援のあり方を深く考える機会となりました。

分科会では、参加者から「自己決定の尊重」「地域性」「周囲の理解と制度」など、多岐にわたる課題が提起されました。

参加者からは、「正解がない」という意見も多く聞かれましたが、

共通の認識として、「利用者本人の幸せを第一に考え、一步步課題をクリアしていくこと」の重要性が確認されました。

今回の分科会は、私たちにとって当然の権利が、障害のある当事者にとっては容易に侵害されうることを再認識する機会となりました。

また、当事者を取り巻く環境によって必要な支援は変化し、画一的な対応では不十分であることも改めて認識しました。

今後も、利用者本人の幸せを追求するために、関係者が連携し、柔軟な支援体制を構築していくことが求められます。

また、学会という場で、地域、立場、考えが違う人たちが一つのテーマで話し合っていくという経験は、一人の利用者をチームで支援をしていくことに似ています。

何を中心に情報を整理し、課題を見つけていくのか、考えの違いを利点として、様々な方法を考え、本人の自己決定を支援できれば良いと考えます。

今回発表された森本様の事例は、まさに皆で自己決定を支えられた好例と言えるでしょう。

「自己決定」が重視される現代において、支援者の学びは尽きることがありません。今後も関係者が連携し、より良い支援のあり方を模索していく必要があります。